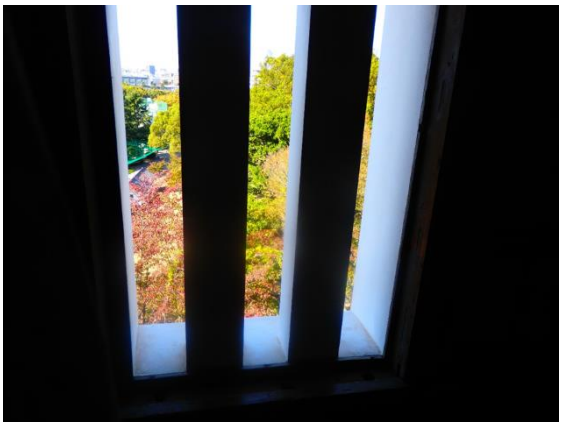
明石の史跡（８２）義士の話



師走をむかえると、われわれ播州人は、歳末定例の行事（たとえば忘年会など）の日取りを決定するときに、「討ち入りの前にしますか、または後に---------」というような会話を、なんらの疑念も持たずに、思わず発してしまう。

先般（１０月頃と記憶している）、神戸新聞紙上に、赤穂市上仮屋の市立歴史博物館において、忠臣蔵を題材とする郷土人形１５０点あまりを、各地より集めて、展示されていたことを紹介する記事に接したことは、記憶にあたらしい。

そういえば、この夏（平成１８年）にも、ＪＲ赤穂駅のロビー周辺を舞台に、地元の劇団の有志が集まり、忠臣蔵のハイライトである討ち入り場面を再現しており、赤穂を訪れた観光客に、その熱演ぶりが紹介されていたことを思い出す。

４００年という歳月を経過したにもかかわらず、いまなお、われわれに強烈なインパクトを与え続けている。当時、事件の舞台である江戸のみならず、人々の受けた衝撃なるものは、想像をこえるものがあったと思われる。

元禄１４年（１７０１）１０月２５日、家督を直常に譲った明石藩八代藩主松平直明は、その１年後の復讐劇（１２月１５日）を耳にしたある日、「内匠殿（浅野長矩）は、よき士をたくさん持たれた」とそれとなく語る。近侍していた家臣は、恥ずかしいという表情をうかべながらも、その行動を褒めたたえた。すかさず直明公は、「汝等は、そのような事は、できないだろうと思う」とおっしゃった。姓名は伝わらないその側近の士は、大いに赤面し、全身に汗をかいていたという（「東播秘談」『講座明石城史』５３２頁）。はたして、われわれは、この近侍の家臣を批判できるだろうか。義士の行動には、第三者的には、純粋に評価するも、当事者として受け止めた場合には、複雑なものがある。赤面した側近の士の立場も、理解できないことはない。

日本歴史学会会員　　茨木　一成